

# 第2回農林水産総合技術支援センター外部評価委員会 会議録

平成23年度12月12日

## 1 あいさつ（安宅農林水産技術支援統括本部長）

第2回目の本日は、「普及指導活動」と「試験研究業務」について評価を頂く予定としています。午前中は、「普及指導活動」について、徳島農業支援センターと鳴門藍住農業支援センターの普及活動や重点課題への取り組み、現地調査など普及状況について評価をお願いいたします。

また、「試験研究業務」については競争的資金を活用した研究事業の応募予定課題について評価ならびに試験研究推進計画の骨子についてご意見を賜りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

## 2 議事

### （1）普及指導活動の評価

#### 1）徳島農業支援センターの活動概要及び重点課題の取り組みについて

徳島農業支援センター所長より、地域の概況、普及推進活動の推進方針や活体制について説明。続いて、担当者より重点課題「活力ある大規模野菜農家の育成」について説明。

### （質疑）

委員長：ボトムアップで3年間の計画を作成したということですが、約1年経過し農家の反応や変化の兆し等について教えて欲しい。

回答：所内の中間評価を終えて、課題設定としては概ね現場の実情に則していると感じている。

委員：所得を上げるためには、面積拡大、低コスト化、ブランド力のアップが必要。JAグループも連携して取り組みたい。

委員：紹介いただいたモデル地区農家では40代以下の方はいますか。

回答：現在は40～70代のみで、40歳以下の営農者はいません。退職後に就農をはじめた方や40代で営農開始した方がいます。

委員：担い手の不足が緊急の課題となっている。後継者がいないと、40歳代以降の規模拡大は、難しいと思いますが、規模拡大への取り組みなどに二の足を踏んでしまいませんか。

地域のリーダーが減っている。この様なモデル地区で、リーダーをつくって、小さな農家を引っ張っていくような形が必要と思っています。

機械の省力化について、畦内施肥を試みたが、コストの低減になるので、検討したらいかがかと思えます。

委員：支援センターが活動されているのは、つくづく感じます。TPP問題など、規模拡大の必要性については分かりますが、これまで農業を担ってきた小規模農家に対してはどのように取り組んでいるのですか。

回答：みなさまから頂いた意見・課題を参考にして、取り組んで参ります。

委員：石井町にも畜産がある。「もうかる農業」を目指してがんばってほしい。儲からないと後継者が育たない。40代、50代、60代で規模拡大を目指すのは疑問があるが、がんばっていただきたい。

委員：先導者等の何か自分のところに取り込めるノウハウがあるはず。先導者の良いところを取り込んでほしい。

零細農家の切り捨てが懸念される。家族経営で農業に取り組む場合の適正面積や機械導入等の経営指標を明らかにする必要がある。

回答：有効な資料をこの課題の中で作成していきたい。

委員：大きな機械導入は県からの主導になるのか、実際に農家を実施しているものをピックアップするかたちになるのですか。

回答：大型機械については、この様な機械があると県の方で示している。

委員：大型機械を導入する場合、みなさんが共有する等、そのシステムを新しく構築するまで含まれるのですか。

回答：共同利用についても、十分検討していきたいと考えています。

委員：大規模にする前提は、農地を借りてやることになるのですか。

回答：借りてやっている農家もあります。

委員：土地は一年中借りているのか、米の後作だけ借りているのですか。

回答：面積の拡大だけでなく、作型の拡大による収量の増加や品質の向上による所得の向上等、生産者のケースケースによって検討する必要があると考えています。

委員：小規模の方も別の方法で、経営が成り立つよう検討して頂きたい。

回答：今回紹介した重点課題以外に、所内で様々な課題について活動しており、小規模農家に対しても取り組みを行っています。

委員長：東黒田農事研究会とJAの生産部会との関連を教えてください。

回答：地域の研究会だが、それぞれが生産部会に加入している。昭和50年ぐらいから、定期的に月1回ぐらい研究会を開催し、勉強している。

## 2) 鳴門藍住農業支援センターの活動及び重点課題の取り組みについて

鳴門藍住農業支援センター所長より、地域の概況、普及推進活動の推進方針や活動体制について説明。

続いて、担当者より重点課題「全国で活躍するとくしまブランド品目の産地支援」について説明。

(質疑)

委員：エンジンは生産者が減少しているが、一戸当たりの面積拡大で維持されている。レンコン、カンショ、なしは、徳島を代表する品目であるので、維持していかなければいけない。レンコンの腐敗病対策は効果があるようなので、普及を図っていただきたい。

委員：登録農薬が無いのですね。登録が無いために現場は大変苦労している。

GAPについては、現場にメリットが出ていない。業界内だけでなく、消費者、国民が理解できるように、伝える努力が必要。

回答：登録の無い農薬については、耕種的な防除での対策を取っていききたい。

GAPについては、消費者には、産地を知りたい、履歴を知りたいという要望があります。

囲い込みされるときは、認証があるものから取引されていくこともあります。

安全性等を消費者へPRしていく必要があると考えています。

委員長：日本農業賞等、応募して賞を取るとブランドを高めることになります。ニンジン、レンコン、カンショ等素晴らしい産地がありますので、積極的に参加されたらいいと思います。

#### ○現地調査

(徳島市)

委員：慣行ロータリーと2軸ロータリーの価格は。

回答：慣行ロータリーが40万円ほどで、2軸ロータリーは70万円ほど。

慣行ロータリーは展示ほ設置にも使用した一般的なもの。

委員：2軸ロータリーで展示ほを設けようとした理由は。

回答：2軸ロータリーそのものは開発されて何年にもなるが、ほうれんそうで湿害が問題となっていることから展示ほが計画された。

委員：除草剤は散布しているのか。

回答：は種後に土壌表面に散布している。

委員：ほ場の持ち主はどのような農家か。

回答：支援センターに対し協力的な農家。このような展示ほはどのような農家にでも頼めるものではない。

(鳴門市)

委員：れんこんのすじ掘りは何年くらい続けるのか。

回答：続けると品質が悪くなるので何年かすると総掘りする。

委員：れんこんの10aあたりの売り上げはいくらくらいになるのか。

回答：2tとれて単価が500円なら100万円になる。実際はなかなか2tとれない。

委員：被覆したポリフィルムはいつまでおいておくのか。その後の処理はどうするのか。

回答：次のれんこんの作付け準備を始めるまでおいておく。被覆しておくと草が生えない。

委員：フィルムとフィルムの継ぎ目はどのようにするのか。

回答：フィルムとフィルムを重ねて踏み込んでいく。

(2) 試験研究業務の評価

競争的資金制度の概要および今年度提出予定課題の概要を説明。

1) 競争的資金の応募課題のプレゼンテーションと助言指導

○多孔質軽量リサイクル資材を利用した土壌改良技術の開発 (農業研究所 黒田専研)

(質疑)

委員長：リン資源が将来不足と言われているので、興味ある試験内容と思われま。どのような試験を予定しているのですか。

回答：製品としてアコヤ貝のリサイクル資材が販売されている。手入れ砂として最適な粒径の大きさについて検討を行う予定です。

委員：アコヤ貝以外にカキ殻等の利用は考えていないのですか。

回答：企業が地元の資源を利用しているため、アコヤ貝を利用しています。

委員：資材を利用することで、有害な物質が土壌に残るようなことはないでしょうか。

回答：色付きガラスに含まれる重金属等の残留は調査予定です。

委員：現場では手入れ砂の入手に苦労しています。アコヤ貝の資材は半永久的に利用可能でしょうか。

回答：砂に比べリサイクル資材の硬度は高いため、手入れ砂が3～5年ですが10年程度は使用できると考えています。アコヤ貝以外のカキ殻等も利用可能と考えています。

○耐暑熱雄豚用飼料の開発 (畜産研究所 新居科長)

(質疑)

委員長：通常豚肉の夏場需用は減少するため、価格は低下するように思われるのですが。

回答：前年夏期の受胎率低下が供給不足の要因となり、夏期の価格高騰に繋がっていると考えていますが、輸入豚肉価格も含めて検討したいと思います。

委員：地球温暖化に伴い夏期の受胎率低下は畜産全体の課題でもあるので、頑張って取り組んでいただきたい。

回答：研究者も問題意識は持っているが、これまで解決策は示されていない。飼料を中心に総合的な解決策を探っていききたい。

委員長：豚の人工授精との関係は。

回答：国内では、豚の場合人工授精が4割、自然交配が6割となっている。

委員：受胎率の低下について、雌側に問題はないのですか。

回答：夏期の雄の精子活力減退が顕著であるため、研究に取り組んでいく。また豚の体温を下げる飼料の開発を行うので、雌についても改善が図られると考えています。

2) 最近の研究成果について

○原油高騰に対応した省エネ型施設カンキツの栽培技術確立（果樹研究所 山本専研）

委員：変温管理技術は直ちに普及する技術に思いますが、いかがでしょうか。

回答：削減効果は8%程度であるが、これまでの3重被覆や排熱回収技術と併せて取り組めればと考えています。

委員：収穫日は1回のみで比較しているが、収穫期間全体で違いはないのですか。

回答：今回の試験は、収穫適期になった日を基準に階級比較を行っている。現場の収穫体系とは異なる面もあります。

○育林の省力・低コスト化を可能にする革新的な大苗等生産技術の開発（森林林業研究所 金磯主任研究員）

委員：急峻な山地では、40cm苗でさえ運搬が大変なので120cmの大苗を植林するのは、近辺まで林道が必要になりませんか。

回答：試験では1回当たり15本程度の運搬を行っております。また、架線を利用した運搬も検討しています。

委員：山地は斜面になっているので、120cmの苗でも生長点を食害される心配はありませんか。

回答：国の森林総合研究所の研究成果では、苗高は120cmが食害被害の目安となっています。

○徳島県産ハモの販売促進を図るための差別化及び品質向上技術の開発（水産研究所 岡崎主任）

委員：生残率が1日目に60%台まで低下しているため、生残率が向上するよう研究に取り組んで欲しい。

委員：輸送や保持技術を開発し、ブランド力強化に繋げている研究は重要と思います。漁師の所得向上に繋がる研究を引き続き行って欲しい

委員長：ハモの取扱い指針を配布した反応はどうですか。

回答：お寿司店では、ハモがどのような魚なのか説明するのに利用していると聞いています。

3) 試験研究推進計画の骨子（案）について

斉藤課長より、試験研究推進計画の概要を説明。

平成23年度内に計画を策定する予定となっています。第3回外部評価委員会では計画原案を示しご意見を頂きたいと思しますので、よろしくお願いいたします。

（意見）

委員：地に足のついた研究に取り組む中で、研究成果としては、良いものが出ていると思います。

また、地球温暖化など外部環境がダイナミックに変化する中では、5年程度の計画が妥当だと思います。

委員：9年前の就任当時に比べ、現在は現場の意見を汲み取った試験研究課題へと変わってきていると感じています。今後も現場へ足を運んで課題の解決に取り組んで欲しい。

委員：「もうかる農業」を実現できれば、後継者など様々な課題解決に繋がると思うので、頑張って取り組んでいただきたい。